

佛法紹隆寺所蔵古典籍 書誌カードのとり方

■概要・基本のルール：

- 今回用いる書誌カードは、20年ほど前から本に合わせて10版ほど改訂しながら使ってきた。良い本をピックアップして詳しく記述することが目的ではなく、多くの本から情報をとり、計量するために作ったカード。
- 書誌カードをとる単位は、一点につき一枚の書誌カードを作成する。
- 項目を覚える必要はない。対応する項目がない情報は裏面に書く。
- 基本的に現物からデータをとるが、★印の項目は辞書やデータベースで情報を補う。
- 作品名等の字体は、新字体を用いて記述する。[例：○勸善懲惡集、×勸善懲惡集]
- 鉛筆を用いる（消せるもの）。ボールペンやシャープペンは資料を痛めるため使わない。消しゴムも基本的に使わない（お寺の許可を得て使っている）。本に付かないように気を付ける。

■書誌カードの各事項・とり方・説明

欄外の項目

- (ア) 所蔵者名：佛法紹隆寺
- (イ) 仮番号：本に挟まっている付箋の番号を転記する（裏面にも書く）
- (ウ) 調査年月日：西暦で記入する
- (エ) 記録者

1. 作品名（ヨミガナ）★

- ✓ 同名異書（同じ書名だが内容が異なる）、異名同書（書名は異なるが内容は同じ）があるため、最後に確定する。＝統一書名。ヨミガナを振る。
- ✓ 作品名（書名）は、その書物を特定し、同一の内容を持つ伝本（でんぼん）を同定するための重要な要素で、正確に判断する必要がある。辞書・データベース（日本古典籍総合目録DB、全国漢籍DB、CiNii Books等）を使って確定する。

2. 外題（げだい）

- ✓ 表紙に記されている書名のこと。転記する。
- ✓ 表紙は後から付けられたものもある（後時的）。出版者の事情で付けたもの。省略形で書かれることもある。
- ✓ 角書き（つのがき）と呼ばれる、新版や絵入り等の情報はとらない。巻も入れない。
 - ◇ 有・無：外題の有・無。
 - ◇ 箋・直：外題が題箋（だいせん）に書いて貼ったものか・表紙に直書（じかがき）か。
 - ◇ 刷・書：題箋が印刷したものか・書いたものか。
 - ◇ 原・後：元からあるものか・後からのものか。

- ◇ 左・中：題箋の位置が左肩か・中央か。左が多い。中は少ない（＝縦長本は中が多い）。
- ◇ 単・双：題箋の枠が単線か・二重線か。

3. 内題（ないだい）

- ✓ 本文の初め（序題や目次題の次あたり）に出てくる元々の題名。転記する。
- ✓ 外題に対して、本の内側に書かれた書名であるため内題と呼ぶ。
- ✓ 内題は原則として必ずある。内題と尾題がセットで、原書の形はこちらに出るため、作品名の決定に用いる。
- ✓ 有・無：内題の有・無。

4. 柱題（はしらだい）

- ✓ 袋綴本の折り目（中心）にある。版木の中心にあるため、版心題（はんしんだい）とも呼ぶ。
- ✓ 巻数や丁数が付記されることがある。出版者の特徴が出るので、情報としてそのまま書き写す。
- ✓ 有・無：柱題の有・無。
- ✓ 省略されることや、省略形で書かれることもある。出版者が付けたもの（後時的）。

5. 尾題（びだい）

- ✓ 本文の最後に出てくる。内題と同じ場合も多いが、異なる場合や無い場合もある。
- ✓ 巻ごと、或いは全巻の最後に出てくる。転記する。
- ✓ 有・無：尾題の有・無。

6. 見返し題

- ✓ 本の見返し（表紙の裏面に貼られた紙の部分）に記載された書名。転記する。
- ✓ 有・無：見返し題の有・無。
- ◇ 扉題（巻頭第一丁表に記載された書名）の有・無。ある場合転記。出版者が付けた題。

7. 表紙

- ✓ 書物を一つのまとまりとして成立させるもの。本の中身を保護する役割を持つ。内容を端的に指し示す情報（外題や簡単な目録等）や、装飾が施されていることもある。
- ◇ 原・後：表紙は外界に触れているので、傷んだり所蔵者の好みによって取り換えられることがある。成立時のオリジナルを原裝、取り換えられたものを改裝（後補）と呼ぶ。
- ◇ 色：濃茶、薄茶、濃青、薄青、黄、赤、黒など。あまり細かく分けない。濃淡を記す。色で時代や内容が類推できることがある。
- ◇ 模様：細かく分けない（仏書は無地のものが多いため）。模様あり・無地の別を記す。
参考：国文研の表紙文様集成
(<https://www.nijl.ac.jp/pages/images/hyousimonyou.pdf>) を参照する

8. 箱・帙・袋・その他

- ✓ 資料を入れる容器がある場合がある。箱等にかかれた書名があれば転記する。

- ◇ 箱：木製の箱
- ◇ 帙（ちつ）：紙製の箱（ピッタリサイズに作っていることが多い）
- ◇ 袋・その他があれば有・無を記す。

9. 料紙（りょうし）

- ✓ 用紙のこと。原料のほとんどは植物繊維。
- ◇ 楮（ちょ）：楮紙（ちょし）。楮（こうぞ）の繊維から製した和紙。日本の書物の材料としてもっとも代表的。8割方は楮紙。
- ◇ 雁皮（がんぴ）：雁皮紙（がんぴし）。斐紙（ひし）とも呼ぶ。緊密で光沢があり丈夫。両面書写に適する。厚めで淡黄色・黄褐色のものを特に鳥の子（とりのこ）と称する。
- ◇ 洋紙：西洋式の製法でつくった機械漉きの紙。
- ◇ その他：混ぜ物をした再生紙もある。

10. 装丁 [図1：装丁の見分け方 参照]

- ✓ 書物の製本の仕方。本の内容や用途、製本の方法（糊付けか糸綴じか）、料紙の種類、所蔵者の好みやその当時の文化によってさまざまな装丁がある。歴史的に古いものから列挙。

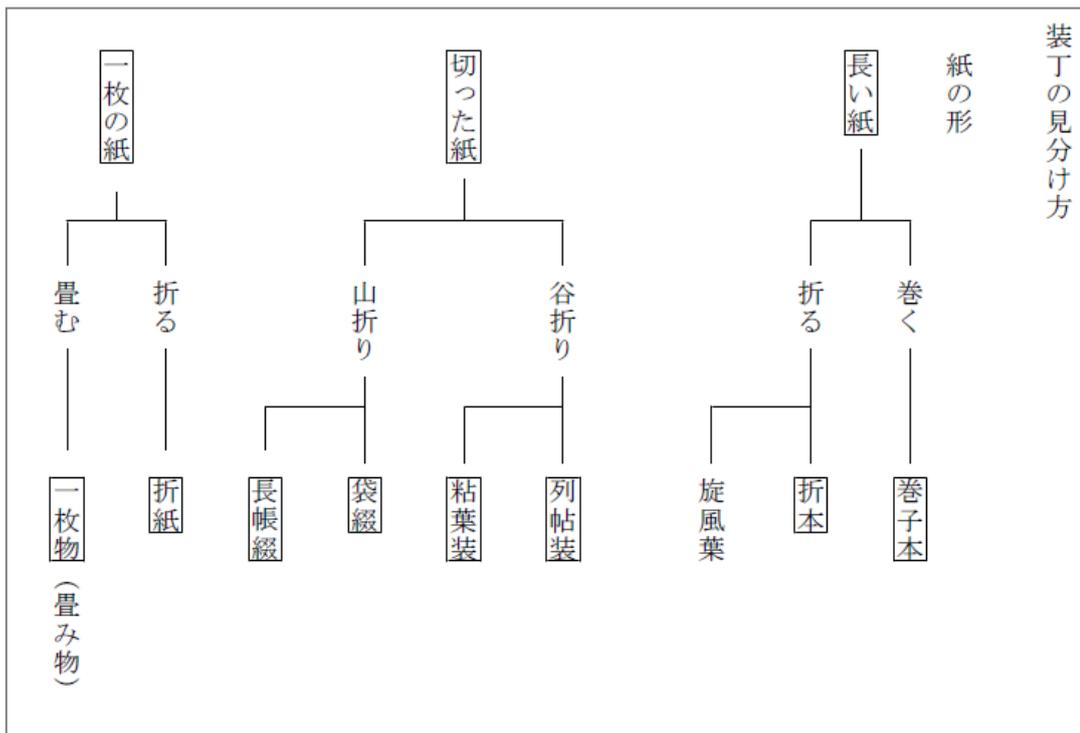


図1 装丁の見分け方

- ◇ 卷子（かんす）：卷子本。料紙を糊で貼って長く繋げ、最後の料紙に軸をつけて巻き込んだ本。巻首には、表紙と巻き紐が付けられていることが多い。単位は「軸」。巻物とも呼ばれる。奈良時代の紙は折ると切れたため、巻物にしていた。紙の製法が変わり、折れるようになってから様々な装丁が可能になった。卷子本は特定の場所を開くのに不便であったり、保管に場所を取るため、折本（おりほん）に改装されることもあった。
- ◇ 折本（おりほん）：卷子本と同じく料紙を糊で貼って長く繋げ、巻く代わりに一定の幅で蛇腹に折り畳み、表紙・裏表紙を付けたもの。単位は「帖」。

なお、折本の表表紙と裏表紙をつないだものを「旋風葉（せんぷうよう）」、二つ折りにした紙を蛇腹状につないだものを「折帖装（おりじょうそう）」と呼ぶが、ここでは便宜上すべて「折本」に含めている。

- ◇ 列帖（れつじょう）：列帖装。料紙を数枚重ねて二つ折りにし（一くくり）、数くくりを重ね、折り目の部分に穴を開けて糸で綴じ、表紙を付けた本（ジャポニカ学習帳はこの形）。両面書写が可能なので通常は厚手の斐紙が使われる。単位は「帖」。
- ◇ 粘葉（でっちょう）：粘葉装。料紙を二つ折りにして複数重ね、それぞれの折り目の外側どうしを糊付けして、背を表紙で覆って糊付けした本。完全に開く見開きと、糊付け部分までしか開かない見開きが交互に現れる。その見た目から胡蝶装（こちょうそう）とも呼ばれる。仏書・歌書などの古写本によく見られ、手製のメモ帳のような形で使われたものもある。簡易な装丁で、糊付けなのでバラバラになりやすい。これを復元するため、糊しろ部分に題や丁付が書かれていることがある。単位は「帖」。
- ◇ 袋綴（ふくろとじ）：二つ折りにした料紙を重ね、折り目の反対側を綴じた本。仮綴じ後、表紙を付け、糸で綴じる。薄い料紙の写本や、古活字版・製版は、両面書写に向かないため、多く袋綴にされた。和書の代表的な装丁。単位は「冊」。
- ◇ 長帳綴（ながちょうとじ）：折紙綴（おりがみとじ）の一種。料紙を二つ折りし、短辺を綴じたもの。横帳綴（よこちょうとじ）とも呼ぶ。大福帳など。
- ◇ 折紙（おりがみ）：一枚の紙を折り畳んだもの。広げて見る。お寺の資料としては、「折紙伝授（おりがみでんじゅ）」などがある。
- ◇ 洋装本（ようそうぼん）：西洋式の装丁。日本では明治20年頃から盛んになった。
- ◇ その他：一枚物（いちまいもの）。見取図や地図など。

11. 写・刊（古活字・木活字・製版・活版）年次 [図2：写・刊の見分け方 参照]

- ✓ 写本・刊本の区別、印刷方法の種類を選ぶ。
- ✓ 年次は和暦、及び西暦をカッコ内に記載する。不明の場合、わかる範囲で〇〇時代（前期、中期、後期）等と記載する。分からない場合は「不明」と記載。
- ◇ 写：手で書かれた本を写本（しゃほん）と呼ぶ。自筆本や手稿本（草稿本）、清書本（浄書本）も写本の類であるが、一般に写本という場合、多くは「転写本」を指す。また、室町時代末期までに移された本を古写本（こしゃほん）と呼んで区別する場合がある。
- ◇ 刊：印刷した本を刊本（かんぽん）、あるいは版本（はんぽん）と呼ぶ。活字（一文字ずつ彫った字を組み合わせる）を用いる場合と、版木（板に彫刻する）を用いる場合とがある。「版」は「板」と書く場合もある。
- ◇ 江戸時代初期以降盛んになる版本と区別して、平安時代中期～室町時代末期に寺院を中心に印刷されていた仏書や漢籍を、特に古版本と称する。興福寺・春日大社で出された春日版、高野山の寺院で出された高野版、比叡山延暦寺で出された叡山版、京都五山や鎌倉五山で出された五山版などがある。佛法紹隆寺には高野版が多く所蔵される。版木は古いですが、刷りは新しく江戸時代以降のものが多い。
- ◇ 古活字（こかつじ）：木製の活字で印刷したもののうち、室町時代末期から江戸時代初期のごく短い期間に行われたものを特に古活字本と呼ぶ。寺院や貴族が私家版を作成する際に用いられた。

- ◇ 木活字（もくかつじ）：江戸時代後期以降、木製の活字で印刷したものを木活字本と呼ぶ。藩校の教科書で使われた。
- ◇ 整版（せいはん）：活字に対して、版木で印刷したものを整版本と呼ぶ。古活字本が次第に衰退し、整版が主流となった。活字本は、大量の活字を必要とし、再版の際に組みなおす必要があるため、量産に向かない。また、摩耗しやすいという特性がある。それに対し、版木は、一度作れば必要に応じて何度でも増刷できる。訓点（返り点、送り仮名）を印刷するには整版がたやすかったという理由も考えられる。
- ◇ 活版（かっぱん）：活版印刷は、活字を並べた組版で印刷したもの。明治期に入り、学問体系が漢学から洋学へと変化する中で、書物の形態も整版本や写本から活版印刷による洋装本へと移る（概ね明治 20 年頃～）。

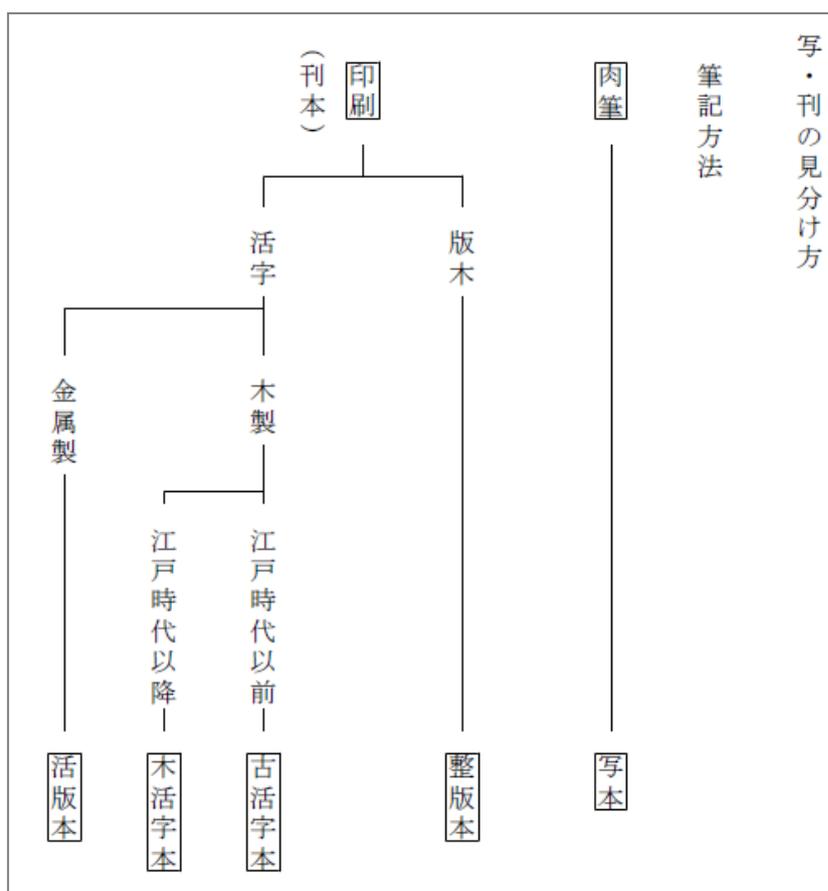


図2 写・刊の見分け方

12. 著（編・撰）者★

- ✓ 著者・編者・撰者の区別を選び、人名を記述する。作品名とセット。DBで確認する。

13. 書写者・書肆名★

- ✓ 書写者（しょしゃしゃ）：写本を書写した人の名前を記述する。
- ✓ 書肆名（しょしめい）：書肆は書店・本屋のこと。書物を出版したり売ったりする店。江戸時代初期に出版活動が始まってから明治初期までは、板元（版元、書肆、本屋）が編集から制作、卸、小売り、古書の売買まで一手に行っていた。書店とは本来、出版社、取次店、新刊本の小売店、古書店の総称であり、現在も出版者や取次店が書店を名乗るのはその名残といわれる。

14. 数量

- ✓ 巻数と冊数を記載する。巻数：内容に準ずる。冊数：現物の数量に準ずる。
例えば、上・中・下を一冊に製本している場合は、1冊3巻とする。
- ✓ 形態が書籍なのか（冊）、卷子なのか（軸）、一枚物なのか（枚）を記録する。

15. 翻刻・影印・画像

- ✓ 複製の有無、DB等での閲覧可能性を示す。複製がある場合は記載する。
- ✓ 複製方法について区別して記録する。
 - ◇ 翻刻(ほんこく):すでにある本や原稿を木版や活版で新たに起こし、刊行すること。
特に写本、版本、外国の本などを再製すること。
 - ◇ 影印(えいいん):古書などを写真に撮り、印刷したもの。
 - ◇ 画像:DBなどで画像が公開されている場合は記載する。国文研、国立国会図書館(NDL)、その他(具体的に記載)

16. 保存状態

- ✓ 保存状態の良・不良の区別を記載する。判読が困難であるなどの状態の場合は不良とするが、多くは良でよい。
 - ◇ 破(やぶれ):破れて文字が読めない状態。
 - ◇ 汚(よごれ):染みなどで文字が読めない状態。
 - ◇ 疲(つかれ):使い込まれて元の形状が保てていない状態。
 - ◇ 虫(むし):虫に喰われて読めない状態

17. 寸法

- ✓ 表紙を基準とした縦×横を0.1cm単位で記録する。
※ミスを防ぐため、必ず「縦を先に計測する」ことを習慣化する。
※資料保全のため金属製メジャーは使用しない。

18. 匡郭(きょうかく)

- ✓ 主として版本に見られる、本文を囲む四周の枠。全て一本線、全て二本線、縦線のみ二本線のものがあり、それぞれ四周単・四周双・左右双と呼ぶ。寸法は本文第一丁表の内法(うちのり)で測る。
- ✓ 界線:行間の区切り線、所謂罫線のこと。有無を記録する。

19. 一面行数・一行字数

- ✓ 一面(半丁)あたりの行数と、一行あたりの字数。版本はある程度規則的であるが、写本では行数・字数に幅がある。この場合、「～字前後」と記録する。

20. 丁付(ちょうづけ)

- ✓ 有・無:紙数を示す数字。1紙につき1数える。記載があるか記録する。

- ✓ 丁付けの位置を記録する。
 - ◇ 柱：版心にあたる部分。
 - ◇ ノドオモテ：ノド部分で、丁の表側。
 - ◇ ノドウラ：ノド部分で、丁の裏側。
 - ◇ カクレ：粘葉の、のりしろ部分。糊付けされていると見えない。
- ✓ 丁数（ちょうすう）：実際に紙数を数えて記録する。序や目次は別に丁数が付されていることもあるが、合計する。冊が分かれば、冊毎に記録する。修復や文化財申請のため。

21. 本文

- ✓ 使用されている文字を記録する。漢字・片仮名・平仮名の別を記載する。漢文の送り仮名は考慮しない。
 - ◇ 書入：所蔵者による書き込み。書物に直接書き込む場合と、別紙に書いたものを挟んだり綴じ込んだりする場合がある。
 - ◇ 同：書写者が書き込んでいる場合は同筆。
 - ◇ 別：後から書き込まれているものは別筆。

22. 所蔵者番号

- ✓ 所蔵者が整理や利用のために付した番号があれば記録する。

23. 蔵書印

- ✓ 所蔵者が捺した印。所蔵者を判定する手がかりになる。一般的に下に捺されているものほど古い傾向にある。
- ✓ 佛法紹隆寺の蔵書印は以下の2種類が多い。作業の省力化のため、省略して記載する。その他の蔵書印はそのまま転記する。
 - ◇ 「宥瑞」印：黒墨の場合「宥瑞墨印」（ゆうずいぼくいん）、朱墨の場合「宥瑞朱印」と記載する。
 - ◇ 「信州上諏訪佛法寺什物宥瑞改」印：「什物印」（じゅうぶついでん）と記載する。

24. 所持者・授受者（じゅじゅしゃ）

- ✓ その本を所蔵していた人を分かる範囲で列挙する。奥書・表紙・蔵書印などから判断する。特に仏書の場合、師匠から弟子へ伝授される場合がある。矢印で流れを示す。

25. 絵 [図3：絵の見分け方 参照]

- ✓ 絵が含まれている場合は、その種類を記録する。
 - ◇ 白描（はくびょう）：筆で描かれた絵の内、墨だけで描かれた白黒の絵。
 - ◇ 彩色（さいしき）：筆で描かれた絵の内、色のある絵。
 - ◇ 墨印（ぼくいん）：印刷された絵の内、白黒の絵。
 - ◇ 色刷（いろずり）：印刷された絵の内、色のある絵。
 - ◇ 丹緑（たんろく）：墨印に、手で彩色を施したもの。朱色の丹、緑色の緑青（ろくしょう）がよく使われるために丹緑と呼ぶ。

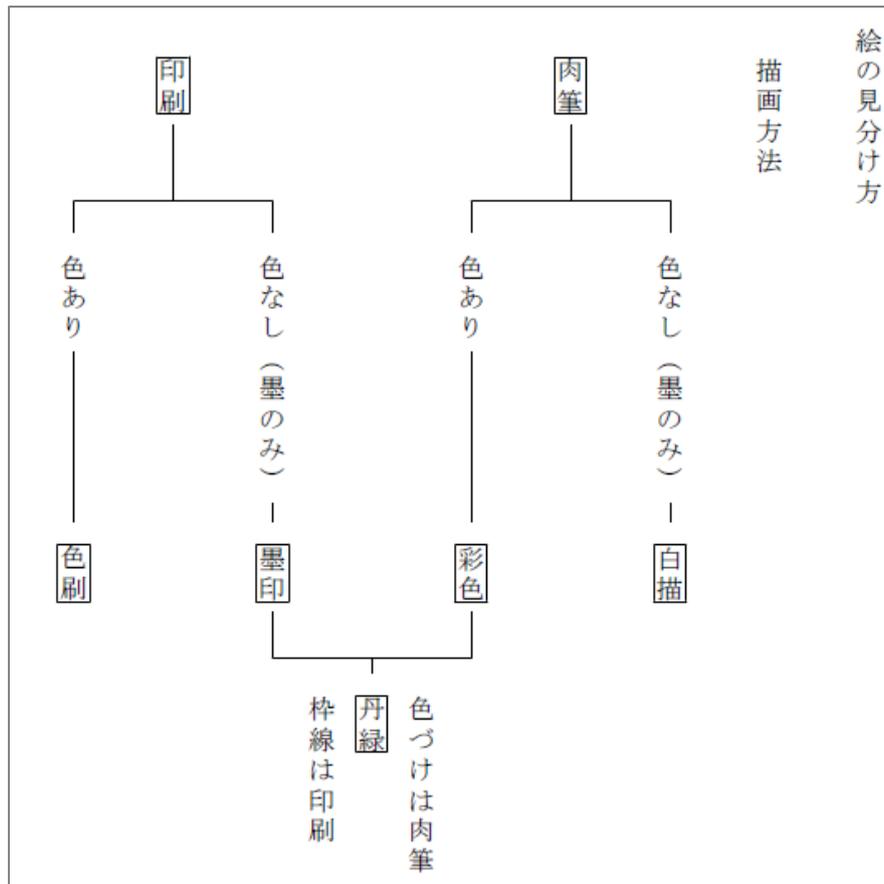


図3 絵の見分け方

26. 序

- ✓ 巻頭にある序文。編著者とは違う人物が書くこともある。
- ◇ 序題（じょだい）：序に書かれている題。
- ◇ 序者（じょしゃ）：序の筆者。
- ◇ 年記（ねんき）：年記があれば記録する。刊記がない場合、発行年の判断基準になる。

27. 跋（ばつ）

- ✓ 巻末に後書き。編著者とは違う人物が書くこともある。
- ◇ 跋者（ばつしゃ）：跋の筆者。
- ◇ 年記（ねんき）：年記があれば記録する。刊記がない場合、発行年の判断基準になる。

28. 奥書・刊記など

- ✓ 裏面には、奥書・刊記をはじめ、表面に記録しきれないことを記載する。必要なら図などでも示す。奥書・刊記は全て書き写す。
- ◇ 奥書（おくがき）：写本の巻末に記される、いつどこで誰が写したのか、という書物の成立に関する情報。基本的に書写されるたびに追加される。ここから書物の来歴を知ることができる。
- ◇ 刊記（かんき）：刊本の巻末に記される、いつどこで誰が出版したか、という書物の刊行に関する情報。

12	著(編・撰)者	写・刊(古活字・木活字・整版・活版)年次	11	10	装丁 卷子・折本・列帖・粘葉・袋綴・長帳綴・折紙・洋装本・その他	9	料紙 楮・雁皮・洋紙・その他	7	表紙(原・後)色・模様など	8	箱・帙・袋・その他(有・無)	6	見返し題(有・無)／扉題(有・無)	5	尾題(有・無)	4	柱題(有・無)	3	内題(有・無)	2	外題(有・無)(箋・直)(刷・書)(原・後)(左・中)(単・双)	1	作品名(ヨミガナ)
13	書写者・書肆名																						

27	跋(有・無) 跋者・年記	26	序(有・無) 序題・序者・年記	25	絵(有・無) 白描・彩色・墨印・色刷・丹緑	24	所持者・授受者(□↓□)	全 卷の内	
								数量	14 (冊・軸・枚)
								翻刻・影印・画像(有・無)(国文研・NDL・その他)	
								15	
								保存状態	良・不良(破・汚・疲・虫)
								16	
								寸法	縦・横 cm × cm
								17	
匡郭(有・無)縦・横 cm × cm									
18	(四周単・双 左右双) 界線(有・無)								
一面行数 19 行 一行字数 字									
丁付(有・無)柱・ノドオモテ・ノドウラ・カクレ									
丁数 20									
本文 漢・片・平 21 書入(同・別)(墨・朱)									
23		蔵書印(有・無)							
22		所蔵者番号(有・無)							

区分

作品名 (ヨミガナ)

勸善懲惡集 (カンゼンチヨウアクシユウ)

外題 (有・無) (巻・直) (刷・書) (原・後) (左・中) (単・双)

勸善懲惡集

内題 (有・無)

勸善懲惡集

柱題 (有・無)

○ 勸善懲惡集 一

尾題 (有・無)

勸善懲惡集

見返し題 (有・無) / 扉題 (有・無)

ナシ

表紙 (原・後) 色・模様など

濃青・ナシ

箱・帙・袋・その他 (有・無)

料紙

楕・雁皮・洋紙・その他

装丁

卷子・折本・列帖・粘葉・袋綴・長帳綴・折紙・洋装本・その他

写・刊 (古活字・木活字・**整版**・活版) 年次 享保13年 (1728) 4月1日

著(編)・撰者

慧燈

書写者・書肆名

敦賀屋九兵衛

数量 全 7 巻の内 6

(冊・軸・枚) 1, 2, 4~7 (巻3モ欠く)

翻刻・影印・画像 (有・無) (国文研・NDL・その他)

保存状態 (良)・不良 (破・汚・疲・虫)

寸法 縦 26.4 cm × 横 18.5 cm

匡郭 (有・無) 縦 21.0 cm × 横 15.7 cm (四周(単)・双 左右双) 界線 (有・無)

一面行数 10 行 一行字数 28 字

丁付 (有・無) (注)・ノドオモテ・ノドウラ・カクレ

丁数 巻1: 序2, 目録1, 本文16 →ウラハ

本文 (漢)・(片)・平 書入 (同・別) (墨・朱)

所蔵者番号 (有・無)

蔵書印 (有・無)

什物印

(1才右上)

宥瑞

絵 (有・無) 白描・彩色・墨印・色刷・丹緑

序 (有・無) 序題・序者・年記

勸善懲惡集・未詳・享保12年12月15日

跋 (有・無)

跋者・年記

• 角書：異朝因縁

• 作者：乞士慧燈

• 刊記：享保十三年戊申四月穀旦

大坂心春橋須慶町

浪華書林
敦賀屋九兵衛板行

• 丁数

卷2：目録 2， 本文 17

卷4： " 2， " 19

卷5： " 1， " 17

卷6： " 2， " 20

卷7： " 1， " 17

• 裏表紙の見返しに付丁あり（巻1）